

尊攘堂誌補遺

尊攘堂誌補遺

昭和三年十月は松陰先生歿後恰かも七十年に當るので、祭典委員等は同年正月管理者たる京都帝國大學の荒木總長、新村圖書館長等と計り、同年十一月舉行せらるべき登極御大禮期に於て、尊攘堂の大祭を執行し、滯洛中の朝野名士にも參列を乞ひ、松陰先生始め勤王諸家を祀り、以て其偉績を偲ふと共に、民心作興の一端にも資せんことを期待してゐた。處が同年夏に至り、故品川子爵に縁故淺からざる時の農林大臣山本悌二郎氏が此舉に深く共鳴せられて、多大の援助を與へらるゝこととなつたので、野村益三子其他

委員等は山本氏を祭典委員長に、荒木總長を同副委員長に擧げて、新村館長始め圖書館の當務者とも協議の上、竟に御大典の御儀は御終了後の十一月十八日を以て祭典を執行することに決定して、各自の分擔を定め、協力して諸般の準備を整ふるに至つた。かくて祭典前日たる十七日に至り、御滯洛中の秩父宮同妃、高松宮並賀陽宮同妃の五殿下には格別の思召を以て、御揃ひ尊攘堂に御台臨の上、遺品、遺墨等台覽の榮を賜はつたので、關係者一同は深き感激を覺えたのであつた。翌十八日には豫定の如く午前十時より出雲路通次郎氏を齋主として祭典を行ひ、山本祭典委員長の祭詞宣讀、堀榮一氏の弔詩朗詠に續き、志士遺族野村益三子、福原俊丸男

等玉串を捧げたる後、來賓として參列の田中首相以下多數顯官名士の參拜もあつて、正午極めて莊嚴裡に、滯りなく未曾有の盛儀を終へたのである。午後には山本悌二郎、徳富猪一郎、武岡豊太三氏の記念講演が學内大講堂で開かれ、又勤王志士遺墨展觀も圖書館閱覽室で催されたが、何れも非常の盛會であつた。當日の參列者には豫て圖書館員の手で編纂せられたる尊攘堂誌、尊攘堂遺墨集等の記念品を頒與した。十九日には一般の參拜觀覽を許すこととなつたが、入場者數千人に達し、尊攘堂設立の趣旨も一般に了解せらるゝに至り、世道人心にも尠からず好影響を與ふるを得たので、當事者の本懐は之に過ぐるものなかつた。

右の如く祭典を滞りなく終了して、豫期以上の成果を收め得たるにつきては、山本委員長始め各委員並大學當事者の絶えざる幹旋と、多大の盡瘁に依れることは申すまでもなきことながら、田中義一男(當時首相)並久原房之助氏(當時遞相)の如き有力者や、武岡豊太氏の如き舊縁故者が進んで此舉に賛成せられ、尠からざる援助を寄せられたることも與つて力ありしことと思はれ、關係者一同の欣懷禁せざる所であつた。茲に附記して諸氏の好意を感謝する次第である。

昭和五年五月十八日京都帝國大學開校記念祝賀日に當り、本學にては學内を開放することとなつたので、圖書館に於ては尊攘堂

内に例の如く、吉田、品川兩先賢の木像を安置し、多數志士の遺品、遺墨を陳列して、一般の觀覽に供し、係員をして夫々説明の任に當らしめたのであつたが、觀覽者幾千名に達し、稀に見る盛會であつた。

昭和六年五月十九日午後二時、東伏見宮大妃(周子)殿下には新城大學總長の先導にて尊攘堂に台臨せられ、陳列の諸藏品に對し新村圖書館長の説明を約四十分に取り、熱心に聽取せられたのは眞に感激の外なかつた。中にも御祖父岩倉具視公が品川子に宛てられたる書翰を熟覽せられ、御感慨深き御様子を拜して、一同の感激は更に深きものがあつた。

篤志研究家又は故老名士の尊攘堂を時々訪問參觀するもの、依

然少からざるは既述の通りであるが、近來全國各地方より高等國民學校其他の教職、生徒等の特に尊攘堂を參觀して、精神修養又は思想善導に資せんとするもの、漸く多きを加ふるに至れるは時節柄注目すべきことにして、當事者の本懐措かざる所である。

因に京都市内高倉通錦小路に在つた舊尊攘堂址は既述の如く、現今銀行集會所となつてゐるが、當時の庭園、泉石等の一部は今猶依然同地域内に保存せられ、往年の名残りを止めてゐるのである。又舊建物（平屋造、十二室）は明治三十三年十二月、田中源太郎氏が譲り受け、一時銀行集會所にて徒弟講習所に宛て、ゐたが、其後伏見の起業銀行頭取平井熊三郎氏が買受けて、之を伏見堀内村に移し二階建に改築した。

（昭和六年九月七日）